

# ヨエル書とラオディキアのセブンスデー・アドベ ンチスト教会 - 第三十五号

Jeff Pippenger

2026-01-27

## 第三十五番

Early Writings の81ページ（そして「81」は、一人の神なる大祭司と八十人の祭司の象徴である）には、ウィリアム・ミラーの第二の夢が記されている。ネブカドネザルのように、ウィリアム・ミラーも二つの夢を見た。ダニエル書第4章におけるネブカドネザルの第二の夢は、レビ記26章におけるモーセの「七たび」の文脈に位置づけられている。ミラーは、2520を教えた際、レビ記26章の「七たび」を例証するためにダニエル書第4章を用いたが、彼はそれを「七たび」と称した。ミラーは、自分がネブカドネザルによって予表されていたことを認識していなかったが、第4章におけるネブカドネザルの2520日間は、ミラーの夢に塵払いの刷毛を持つ人が現れる以前に、「scatter」という語と、それが「七たび」現れるという事実との双方によって表されている。

ミラーはホホワイト姉妹から「Father Miller」と呼ばれているが、それはカトリックがそうするような異教的な意味合いではなく、父祖アブラハムになぞらえる父祖的な意味においてである。ミラーは象徴であり、契約の人であって、十四万四千人との最終契約へと至る途上における聖書的象徴の連鎖を表象している。ヨエルは、終わりの日には老人たちが夢を見ると告げており、ウィリアム・ミラーは我々の歴史におけるその老人であり、また、ウィリアム・ティンダルの「もし神が私の命をお守りくださるなら、幾年も経たぬうちに、鋤を引く少年があなたよりも聖書に通じるようにしてみせよう」という預言を成就した農夫でもある。

神は、聖書を信じていなかった一人の農夫の心に働きかけるために御使いを遣わし、彼を預言を探求するよう導かれた。神の御使いたちはその選ばれた者を繰り返し訪れ、彼の思いを導いて、これまで神の民にとって暗く閉ざされていた預言を彼に理解させた。真理の鎖の最初の環が彼に与えられ、彼はさらに導かれて環から環へと探し求め、ついには神の御言葉を驚きと賞賛の念をもって仰ぎ見るに至った。彼はそこに完全な真理の鎖を見た。かつて彼が靈感のないものと見なしていたその御言葉が、今やその美しさと栄光をもって彼の目の前に開かれた。彼は、聖書の一部が別の部分を説明していることを悟り、ある箇所が理解に閉ざされているときには、御言葉の別の箇所の中にそれを解き明かすものを見いだした。彼は、聖なる神の御言葉を喜びをもって、またこの上ない敬意と畏敬の念をもって受け止めた。Early Writings, 230.

ミラーは、ティンダルの預言を成就した農夫であり、ダニエル書8章14節の封印が解かれることにより彼が集成した預言的知識の最初の刊行は、欽定訳聖書の刊行から二百二十年後に当たる1831年であった。ジョン・ウィクリフ、ウィリアム・ティンダル、そして1611年の欽定訳聖書の刊行は、二百二十年の預言を開始する三つの道標を表しており、その預言は、ティンダルの鋤をひく少年が神の御言葉を第一の天使のメッセージへと開くときに終結することになっていた。その第一の天使は1798年に到来し、第三の天使は1844

年に到来した。ウィクリフ、ティンダルおよび欽定訳聖書は、ティンダルの預言を成就することになる農夫と結びつき、彼は1798年から1844年に至る三人の天使の歴史を象徴することとなる。

ウィリアム・ミラーのアルファの発見はレビ記26章の2520年であり、オメガの発見はダニエル書8章14節の2300年であった。ユダに対する2520年の離散は紀元前677年に始まり、1844年に終わった。ダニエル書8章14節の2300年は1844年に終わった。両者はいずれも1844年に終わり、ウィリアム・ミラーのアルファとオメガの発見の起点は220年隔たっていた。「220」は、二人の証人に拠るウィリアム・ミラーの象徴である。ミラーのアルファとオメガの発見は1798年と1844年によって表される。北王国に対する2520年の離散は1798年に終わり、その46年後の1844年に2300年が終わった。

1798年に終結したイスラエルに対する2,520年はその日付を指し示し、1844年に終結したユダに対する2,520年は220年という期間をもたらす。すなわち、イスラエルに対する2,520は46年の預言的期間を、ユダに対する2,520は220年の預言的期間をもたらすということである。その期間のアルファは紀元前677年、オメガは紀元前457年であり、すなわち、46年の預言的期間と220年の預言的期間のアルファは2,520によって表され、両方の線のオメガは2,300である。二つの2,520年の「散らし」は、2,520に始まり2,300で終わる期間について二人の証人を立てる。これら両方の線は、ウィリアム・ミラーのアルファとオメガの発見を指し示している。

#### ウィリアム・ミラーの夢

私は夢を見た。神が、見えない御手によって、黒檀製で真珠が巧みに象嵌された、長さは約十インチ、六インチ四方の精巧な小箱を私に送ってくださった。小箱には鍵が付けられていた。私はすぐにその鍵を取り、小箱を開けた。すると驚いたことに、あらゆる種類と大きさの宝石、ダイヤモンド、貴石、そしてあらゆる大きさと価値の金貨や銀貨が、小箱のそれぞれの場所に美しく並べられて、いっぱい詰まっていた。こうして並べられたそれらは、太陽にのみ比肩し得るほどの光と栄光を放っていた。

その中身の輝きと美しさ、そして価値に心は喜びで満たされたが、この素晴らしい光景を自分ひとりで楽しむわけにはいかないと思った。そこで私はそれを部屋の中央のテーブルに置き、望む者は誰でも来て、この世で人が見たうちで最も壮麗にして輝かしい光景を見られるよう知らせた。

人々が入って来るようになり、当初は人数も少なかったが、やがて群衆となるまでに増えていった。彼らが最初にその箱の中を覗き込んだときには、驚嘆し、歓喜の声を上げた。ところが見物人が増えると、皆がその宝石をかき乱し、箱から取り出して卓上に散らした。

私は、所有者が宝石箱と宝石の引き渡しを、再び私から求めるだろうと考え始めた。もしそれらが散らされるに任せてしまえば、以前のように宝石箱の所定の場所に二度と納めることはできないだろうし、その責任はきわめて重大で、私には到底果たし得ないと感じた。そこで私は、人々に対して、それらに手を触れず、また宝石箱から取り出さないよう切に懇願し始めた。ところが、私が懇願すればするほど、彼らはますますそれらを散らし、今や彼らは部屋中、床の上にも、この部屋のあらゆる家具の上

にも、それらをばらまいているように見えた。

そのとき私は、彼らが本物の宝石や貨幣の中に、無数の偽物の宝石と偽造貨幣を紛れ込ませてばらまいているのを見た。私は彼らの卑劣な振る舞いと恩知らずぶりにひどく憤慨し、そのことを戒めて非難した。だが、私が戒めれば戒めるほど、彼らは本物の中に偽物の宝石と偽造貨幣をますますばらまいた。

そこで私は肉体の魂にかき乱され、腕力に訴えて彼らを部屋の外へ押し出し始めた。だが一人を押し出しているそばから、さらに三人が入ってきて、土や削りくずや砂や、あらゆる種類のがらくたを持ち込み、本物の宝石やダイヤモンドや硬貨を残らず覆い隠し、すべてが見えなくなるまで続いた。彼らはまた私の小箱を引き裂いて粉々にし、その破片をがらくたの中にまき散らした。私の悲しみや怒りを顧みる者は誰もいないのだと思った。私はすっかり気力を失い、落胆して、腰を下ろして泣いた。

このように大いなる喪失と自らの責任のゆえに涙を流し嘆き悲しんでいたとき、私は神を思い起こし、私に御助けを遣わして下さるよう切に祈り求めた。

直ちに戸が開き、人々が皆そこを立ち去ったのち、一人の男がその部屋に入って来た。彼は手に塵払いの刷毛を携え、窓を開け、室内から塵と芥を払い出し始めた。

彼にやめてくれと叫んだ。というのも、がらくたの中に貴重な宝石がいくつか散らばっていたからだ。

彼は私に『恐れるな』と言った。彼が『彼らを顧みる』であろうからである。

すると、彼が塵やごみ、偽物の宝石や贋金を掃き払っているうちに、それらは皆、雲のように舞い上がって窓から外へ出ていき、風に運ばれていった。その騒ぎのさなか、私はほんの一瞬目を閉じた。目を開けると、ごみはすっかりなくなっていた。貴重な宝石やダイヤモンド、金貨や銀貨が、部屋じゅうに溢れるほど散らばっていた。

彼はそれから、前のものよりはるかに大きくていっそう美しい小箱をテーブルの上に置き、宝石、ダイヤモンド、硬貨を一握りずつかき集めてはその小箱に投げ入れ、いくつかのダイヤは針の先ほどの大きさしかなかったにもかかわらず、一つも残らなくなるまで続けた。

そして彼は私に「来て見なさい」と呼びかけた。

私は小箱の中を覗き込んだが、その光景に目がくらんだ。それらは以前の栄光の十倍の輝きで光っていた。私は、それらが、塵の中にそれらをまき散らし踏みにじったあの邪悪な者たちの足によって、砂の中で擦り減らされてしまったのだと思っていた。ところがそれらは小箱の中に美しく整然と並べられ、それぞれがあるべき場所にあり、投げ入れた者が目に見えて苦労した形跡もなかった。私は喜びのあまり叫び声をあげ、その叫びで目が覚めた。Early Writings, 81-83.

祭司を象徴する「81」頁に始まり、その夢は、ウィリアム・ミラーの人性を通して神性によって集成された基礎的真理を、ラオデキヤのセブンスデー・アドベンチスト教会が破壊してきた働きの歴史を明らかにしている。歴史は、ミラーが「非常な喜びをもって叫んだ」とき、そしてその叫びが彼を「目覚めさせた」ときに終わる。夢において表象され

ている歴史は、真夜中の叫びの頂点である第三天使の大いなる叫びにおいて結末を迎える。ミラーの夢の歴史叙述はまた、ミラー派の歴史の道標をも表しており、それゆえ同様に、十四万四千人の運動の並行史も表している。同様に重要なのは、その夢の歴史的表象が、2023年に繰り返し始めた歴史の預言的フラクタルも内包しているという点である。

十四万四千人の歴史において認められてきた真理の珠玉は、2004年に公に記録され、さらに2012年にも、散らされることが運命づけられていた一群を集めた『ハバククの表』の提示の際に、再び公に記録された。これらの真理は、1989年に封印が解かれた真理の最初の提示とともに、2004年に表に掲げられた。当時は「少数」がそのメッセージを顧みたにすぎなかったが、2012年には、『ハバククの表』と題する95回にわたる提示が群衆を引き寄せた。というのも、「人々は入りはじめ、最初は数が少なかったが、やがて群衆となるまでに増し加わった」からである。

2012年から2020年7月18日に至るまで、それらの真理は漸次散逸し、塵芥に覆い隠された。2020年7月18日には、ハバククの諸表のメッセージの提唱者たちが、三日半の期間にわたり離散させられた。

そして、彼らはその証しを終えると、底知れぬ淵から上ってくる獣が彼らに対して戦いを挑み、彼らに打ち勝って、彼らを殺す。彼らの死体は、霊的にはソドムおよびエジプトと呼ばれ、また、わたしたちの主が十字架につけられたところでもある、大いなる都の大通りに放置される。諸民、諸族、諸言語、諸国民に属する人々は、三日半の間、彼らの死体を見、その死体が墓に納められるのを許さない。地に住む者たちは彼らのことで喜び楽しみ、互いに贈り物を送り合う。これは、この二人の預言者が地に住む者たちを苦しめたからである。黙示録 11:7-10。

2023年12月30日の安息日に、Future for AmericaはZoom会議に参加し、2020年7月18日以来初めての公の集会となった。2023年12月30日は、2020年7月18日から1,260日後、すなわち「三日半」に当たる。エリヤとモーセが街路で死んでいた間、他の一群は「歓喜している」。Future for Americaは2023年7月に預言的メッセージの刊行に復帰した。というのも、その時から全地に向けて出て行くべきメッセージは、預言上の必然として、「荒野」から出なければならなかったからである。三日半、すなわち1,260日は、「荒野」である。

そして女は荒野へ逃げた。そこには神によって彼女のために備えられていた場所があり、彼女がそこで千二百六十日の間養われるためであった。ヨハネの黙示録 12:6

「荒野」は「千二百六十日」、すなわち1,260日であり、また「三日半」でもあって、黙示録12章6節において示されている。また、「126」は1,260の十分の一である。そのとき封印が解かれて明らかにされた驚くべき真理の一つは、レビ記二十六章における「七たび」の祈りの成就としての悔い改めの必要性であった。

1260日はまた2520日の象徴でもある。北王国に対する「七つの時」は紀元前723年に始まり、1798年に終わった。中間点は538年であり、この結果、前半の1260年間は異教が聖所と軍勢を踏みにじり、後半の1260年間は教皇権が聖所と軍勢を踏みにじったことになる。この預言的構造は、キリストの洗礼から十字架に至る1260日と整合しており、その後、西暦34年、すなわち福音が異邦人に及んだ時に至るまでの1260の預言日が続く。ゆえに、二つの証しによって、1260は2520日の一部、すなわちレビ記二十六章におけるモーセの

「七つの時」である。

2020年7月18日の安息日に始まり、2023年12月30日の安息日に至る「荒野で叫ぶ者の声」の期間においては、2023年7月にその声が叫びを上げ始め、そして「荒野」の期間が2023年12月30日の安息日に終わったとき、モーセとエリヤの復活が到来した。その声のメッセージは、十人の乙女のたとえの文脈において、各改革運動に共通し並行する第一の失望という道標が、2020年7月18日の誤った予告を説明していることを指摘した。それは、レビ記二十六章の祈りによって表される悔い改めへと、男女を呼びかけた。ミラーの夢は、彼が「このように私は大いなる損失と責任のゆえに泣き嘆いていたとき、神を思い起こし、私に助けを遣わしてくださるよう切に祈った」と記しているとき、まさにその悔い改めを表している。

## 来て、見よ

ミラーの夢は、「来て見よ」という二度の表現によって区分されている。最初はミラーが人々を「来て見よ」と招き、二度目は「dirt brush man」がミラーを「来て見よ」と招く。「来て見よ」は、封印が解かれた預言的真理を特定する預言的象徴である。最初の四つの封印にはそれぞれ、「来て見よ」という命令が含まれている。

そして、小羊が封印の一つを開いたとき、私は見た。また、雷の轟きのような響きで「来たれ、見よ」と言う四つの生き物の一つの声聞いた。... また、彼が第二の封印を開いたとき、私は第二の生き物が「来たれ、見よ」と言うのを聞いた。... また、彼が第三の封印を開いたとき、私は第三の生き物が「来たれ、見よ」と言うのを聞いた。... また、彼が第四の封印を開いたとき、私は第四の生き物の声が「来たれ、見よ」と言うのを聞いた。ヨハネの黙示録 6:1、3、5、7。

ミラーの夢の冒頭の「来て見よ」はアルファであり、結びの「来て見よ」はオメガである。夢は、夢の冒頭における封印の開封を宝石として指し示し、それらが「並べられると、太陽にのみ匹敵する光と栄光を反射した」と述べる。キリストがミラーにオメガを「来て見よ」と招かれたとき、ミラーは「その光景に私の目は眩んだ。それらは以前の栄光の十倍の輝きを放っていた」と言う。アルファの光は太陽のごとく、オメガの光は太陽の十倍であった。

## 散らす

ミラーの嘆きと悔い改めは、最初の「come and see」に始まり、最後の「come and see」に終わる期間の終わりにおいて表されている。ミラーが民に向けたメッセージの封印を解くことをもって始まり、次いでキリストがミラーに対するメッセージの封印を解くことをもって終わるその期間において、「scatter」という語は「seven times」として表されている。ミラーはその語をさらに用いることになるが、最初に封印が解かれる時と最後に封印が解かれる時とのあいだでは、「scatter」は「seven times」として表されている。聖書は、「seven times」の裁きを「scatter」という語と同一視している。

わたしはあなたがたを異邦人の間に散らし、あなたがたを追って剣を抜き放つ。あなたがたの地は荒廃し、あなたがたの町々は荒れ果てる。レビ記26章33節

まさに最初にミラーが見いだした真理は、レビ記二十六章の「七つの時」であった。そして彼の夢において、ミラーのメッセージが公にされてからキリストのメッセージが公にされるまでの期間に、ウィリアム・ミラーの働きによって表象されるすべての基礎的真理が、ラオデキア的なセブンスデー・アドベンチストの神学者たちが持ち込む瓦礫や偽造貨幣によって覆い隠されることになっていた。その基礎的真理の拒絶は、アルファからオメガに至る歴史の間における七度の離散として表象されている。「七つの時」はウィリアム・ミラーの働きの象徴であり、その働きはセブンスデー・アドベンチズムの基礎をなしており、その基礎の中心的支柱はダニエル書8章14節の二千三百日である。これが示しているのは、ウィリアム・ミラーの最初すなわちアルファの発見であった二千五百二十年の離散が一つの時期の起点を画し、その時期はミラーのオメガの発見、すなわち二千三百日によって終結したということである。

ラオデキア的セブンスデー・アドベンチズムが1863年に「七つの時」を退けたとき、彼らはウィリアム・ミラーの第一の発見、すなわち彼のアルファの発見であり基礎的発見を退けたのであった。ミラーの発見の最後は2,300日であり、これは彼のオメガの発見であって、集大成的発見であった。1798年に終結した「七つの時」は2,520を標示し、2,300日は1844年に標示された。

塵払いの男こそが、宝石が七たび散らされた後にそれらを集める者である。そのとき、その小箱はより大きく、より美しくなり、太陽より十倍も明るく輝く。十は試練の象徴であり、ゆえにそれらの宝石は「太陽の日」に関する試練において輝く。こうして、ミラーの夢は1798年に始まり、日曜法における第三天の大いなる叫びで終わる。

1798年から1863年に至るミラー派の歴史は、また、1798年から間もなく到来する日曜法に至る歴史でもある。ウィリアム・ミラーの夢において、ミラーが「来て見よ」と言う時から塵払いの男が「来て見よ」と言う時までの間に表象されている歴史は、1798年から1863年に至る期間であると同時に、1798年から日曜法に至る期間でもある。1863年で終わるその線は、1798年に始まり日曜法で終結する線の預言的フラクタルである。これら両方の線はミラーの夢において表象されている。

1844年10月22日における閉ざされた戸は、日曜法における閉ざされた戸を予表する。1844年に成就した二千三百年の預言は、日曜法を予表する。

ダニエル書8章14節に示されている、聖所の清めのために私たちの大祭司としてキリストが至聖所に来られること、ダニエル書7章13節に示されている人の子が「日の老いたる者」のもとに来られること、そしてマラキが予告した主がご自分の宮に来られることは、いずれも同じ出来事の描写である。また、これはマタイ25章の十人の乙女のたとえにおいてキリストが述べられた、花婿が婚礼に来ることによっても表されている。『大争闘』426ページ。

## 線

ミラーの諸発見におけるオメガは二千三百年の預言であった。ゆえに、1844年も日曜法も、ともに二千三百年によって表されている。これは、両方の線において二千五百二十がアルファであり、二千三百がオメガであることを意味する。一方の線は1863年に終結し、他

方の線は日曜法において終結する。両方の線において、二千五百二十の預言はアルファ、あるいは礎石である。ミラー派の基礎史における1798年より1863年に至るフラクタルは、オメガ、すなわち十四万四千人の冠石の歴史における別のフラクタルとも整合する。

9/11に、神はご自分の民に、エレミヤの「古き道」へ立ち返るようお召しになった。その「古き道」は土台であり、その土台はさらに、基礎となる歴史の使者によって表され、その使者はさらに、自らの基礎的なアルファの発見である「七つの時」によって表されている。「七つの時」は十四万四千人の土台の象徴であり、9/11に、その群れの封印は、ウィリアム・ミラーとアドベンチズムの最初の基礎的真理によって代表される、土台を試すメッセージによって始まった。9/11に封印の時が始まり、間もなく到来する日曜法において、十四万四千人の封印の時は終結する。

その歴史は、2520に始まり2300に終わるフラクタルであり、ゆえにその歴史は、ウィリアム・ミラーの夢に表象された預言史における第三の線である。2520は1798年に成就し、2300は1844年に成就した。その二本の線が表す業は、キリストがご自身の神性を私たちの人性と結合させる御業である。これは、罪人を聖徒へと変え、低次の本性の上にあるべき高次の本性を本来の王座に復させる御業である。このゆえに、人間の身体は、身体のすべての細胞を完全に再生するのに2520日を要し、しかもその同じ身体は、男性の23本の染色体と女性の23本の染色体が結合することを基礎としている。それらが共に生み出すのは生ける神殿であり、これは「46」という数で表されるが、それは1798年から1844年までの期間であり、すなわち、ウィリアム・ミラーの夢における、1798年の2520から1844年の2300に至る期間である。

ウィリアム・ミラーの夢には、注目に値するもう一つのフラクタルも含まれている。9/11から日曜法に至る過程は、1798年から日曜法に至る過程のフラクタルであり、すなわち1798年から1863年に至る場合に見られるのと同様である。2023年から日曜法に至る過程は、9/11から日曜法に至る過程のフラクタルであり、これこそが、ミラーの夢の中のすべての線がそれらすべてのオメガとして指し示している歴史である。これは、原初の真理が太陽の十倍にまで増大される時期である。

## 二つのバズル

1840年代において、「bustle」という語（名詞として）は、一般に、精力的で多忙で、あるいは騒がしい活動を意味し、しばしば大騒ぎ、興奮、あわただしさ、動揺といった含意を帯びていた。これは、群衆の中、家庭内、市場、あるいは特定の出来事の最中であれ、活気ある動き、喧騒、またはせわしなく立ち働くありさまを指した。したがって、ミラーの夢における「bustle」とは、まさにその時に起こっている活動のにわかな活発化、興奮、もしくは差し迫った用務を描写するものであり、現在の状況または当該の場面における一過的なざわめきや喧騒を意味する。

ミラーはこう述べている。「すると、彼が塵芥、賈の宝石と偽造貨幣を掃き払っているうちに、それらは皆、雲のように立ちのぼって窓から出ていき、風がそれらを運び去った。その騒ぎのさなか、私はひととき目を閉じた。目を開けると、塵芥はすべて消え去っていた。」

「騒ぎ」はミラーの夢の中で二つの時点を示している。第一は群衆が宝石を散らしているとき、次に塵払いの刷毛を持つ男が窓を開き、偽の宝石を掃き出し始めるときである。第一、すなわちアルファの騒ぎは宝石を覆い隠すことであり、第二、すなわちオメガの騒ぎは宝石の回復である。この騒ぎの間、ミラーは目を閉じた。ミラーは1849年に安息に就いたが、それは、キリストがご自身の民の残りの者を集めるために再び御手を差し伸べておられた、まさにその時点であった。そのときミラーは目を閉じ、そして1850年には、ハバククの「幻を書き記し、板の上に明瞭にせよ」という命令の成就として、彼の諸真理が再びテーブルの上に置かれた。その騒ぎの期間、ミラーは目を閉じ、彼が目覚めると、宝石は回復の途上にある。

彼の夢における第二の騒動は、十四万四千人の旗印が、ゼカリヤが冠の上の宝石と認める旗印として、よみがえらされ、洗い清められ、純化されつつあるときに起こる。

その日、彼らの神、主は、御自分の民の群れのように彼らを救われる。彼らは冠の石のようになり、主の地において旗印として掲げられるからである。なんと大いなるかな、その慈しみ、なんと大いなるかな、その美しさ。穀物は若者たちの心を喜ばせ、新しいぶどう酒は乙女たちの心を喜ばせる。後の雨の時に、あなたがたは主に雨を求めよ。主は光り輝く雲を造り、彼らに雨の驟雨を与え、各人に野の青草を与えられる。偶像は虚しいことを語り、占い師らは偽りを見、偽りの夢を告げ、むなしく慰める。それゆえ、彼らは群れのようにさまよい、牧者がいないために悩まされた。わたしの怒りは牧者に向かって燃え上がり、わたしは雄山羊どもを罰した。万軍の主は、その群れであるユダの家を顧み、戦いにおいて御自分の麗しい馬のように彼らをされた。  
ゼカリヤ 9:16-10:3

「御民の群れ」は、旗印であると同時に、冠を飾る石（宝石）でもある。「御民の群れ」は後の雨の時に明らかにされる。というのも、後の雨の時に後の雨を求めよとの命が与えられているからである。この群れは、エレミヤの「昔からの道」ではなく、おのおの自分の道に歩いていった「群れ」と対照をなす。後の雨の時、御民であるその宝石は、戦いにおいて主の麗しい軍馬となる。その「麗しい軍馬」とは勝利の教会であり、初代のキリストの花嫁において表象され、第一の封印の時代に白い馬として勝ち得てはなお勝つために出て行ったペテロによって象徴されている。

小羊が封印の一つを開いたとき、私は見た。また、あたかも雷鳴の響きのように、四つの生き物のうちの一つが「来たれ、見よ」と言うのを聞いた。そこで私は見た。見よ、白い馬がいた。それに乗っている者は弓を持っており、彼には冠が与えられ、彼は勝ち進み、さらに勝つために出て行った。ヨハネの黙示録 6:1、2。

それゆえ、ペテロは、五旬節における前の雨の注ぎの時の使徒たちの初代のキリスト教会の象徴であり、また、五旬節の注ぎによって予表されていた後の雨の時の最後のキリスト教会の象徴である。

また、わたしは天が開かれるのを見た。見よ、白い馬があり、その上に座しておられる方は「忠実にして真実」と呼ばれ、義をもって裁き、また戦いをなす。その目は火の炎のようであり、その頭には多くの冠があった。また、ただ彼自身のほかは誰も知らない名が記されていた。そして、彼は血に浸した衣をまとっており、その名は「神

のことば」と呼ばれている。さらに、天にある軍勢は、白く清い細い麻布を身にまとい、白い馬に乗って彼に従った。黙示録 19:11-14。

白い馬は、エゼキエル書37章において復活するキリストの軍勢を表している。彼らは凱旋の教会であり、また冠の宝石でもある。というのも、キリストは後の雨の時にご自身の栄光の御国を確立されるからである。御国の代表として、十四万四千人は冠の上の宝石である。その冠は、二千三百日の終結において彼が受け取る御国の象徴であり、その二千三百日の終結は1844年10月22日であり、また日曜法の時に再びそうなる。天の窓が開かれる後の雨の時に、その白い馬の御国は興される。ヨハネは天が開かれたときに白い馬を見たからである。

1849年のアルファの喧騒のただ中であって、ミラーはしばしの間、死のうちに目を閉じた。ミラーはエリヤであり、そのエリヤは2020年7月18日に死に、オメガの喧騒に至るまで一千二百六十日のあいだ通りに横たわり、その後、覚醒させられた。彼の覚醒の到来は、塵芥を掃き出すために塵払いの男が天の窓を開いたときとして標示される。天の窓が開かれるとき、白馬の軍勢が起こされ、そのとき真偽の分離が明らかにされる。その分離はマラキ書にも明示されている。

十分の一をことごとく倉に携えて来て、わたしの家に食物があるようにせよ。今これによってわたしを試してみよ、と万軍の主は言う。わたしがあなたがたのために天の窓を開き、受けきれないほどの祝福を注ぐかどうか、見よ。マラキ 3:10。

預言者の霊は預言者に服従する。また、ヨハネ黙示録のヨハネ、ミラーの夢、マラキは、天の窓が開かれる時について三つの証言を提示する。ミラーの夢において、それは「来て見よ」という呼びかけのオメガに当たる。アルファにおける喧騒は散らしが始まった時であり、オメガは集めが始まる時である。

ミラーの夢の考察をさらに進める前に、その夢に関するジェームズ・ホワイトの注解をここで取り上げる。ジェームズ・ホワイトは、真の宝石を神の真の民、偽の宝石を悪しき者と同定している。私は、宝石を、誤謬に対置される真理と同定する。宝石と偽の宝石とは、いずれも、誤謬および偽の使者に対置される、メッセージとその使者の双方を表している。

### ミラー兄弟の夢

次の夢は二年以上前に Advent Herald に掲載された。その時私は、それが私たちの過去の再臨の経験を明確に示しており、散らされた群れの益のために神がその夢を与えられたのだと悟った。

主の大いなる恐るべき日が間近に迫っていることを示すしるしの中に、神は夢を備えておられる。ヨエル書2:28-31、使徒行伝2:17-20参照。夢は三つの仕方である。第一に、「多くの仕事によって」。伝道者の書5:3参照。第二に、汚れた霊とサタンの欺きのもとにある者は、その影響によって夢を見ることがある。申命記8:1-5、エレミヤ書23:25-28、27:9、29:8、ゼカリヤ書10:2、ユダの手紙8節参照。そして第三に、神は昔から、また今も、天使と聖霊の働きを通して来る夢によって、多かれ少なかれご自分の民を教えておられる。真理の明るい光の中に立つ者は、神が自分に夢をお与

えになるとき、それと分かる。そのような者は偽りの夢に欺かれ、迷わされることはない。

そして彼は言った、「今、わたしの言葉を聞け。もしあなたがたのうちに預言者がいるなら、わたし、主は、幻のうちに彼にわたし自身を顕し、夢のうちに彼に語る。」民数記12:6。ヤコブは言った、「主の御使いが夢のうちにわたしに語られた。」創世記31:2。「そして神は夜の夢において、シリア人ラバンのもとに来られた。」創世記31:24。ヨセフの夢〔創世記37:5-9,〕を読み、その後、それらがエジプトにおいて成就した興味深い物語を読みなさい。「ギベオンにおいて、夜の夢に、主はソロモンに現れられた。」列王記上3:55。ダニエル書第2章の偉大にして重要な像は夢において与えられ、第7章の四つの獣等も同様である。ヘロデが幼子の救い主を滅ぼそうとしたとき、ヨセフは夢においてエジプトへ逃れるようにと警告を受けた。マタイ2:13。

「そして、神は言われる。『終わりの日に、わたしはわたしの霊をすべての人に注ぐ。あなたがたの息子たちと娘たちは預言し、あなたがたの若者たちは幻を見、あなたがたの老人たちは夢を見る。』使徒行伝 2:17」

夢と幻による預言の賜物は、ここでは聖霊の実であり、終わりの日には、しるしとなるに足るほどに現されるであろう。それは福音の教会に与えられた賜物の一つである。

「そして、彼は、ある者を使徒として、ある者を預言者として、ある者を伝道者として、ある者を牧者および教師として与えた。それは、聖徒たちを整えるため、奉仕の働きのため、キリストのからだを建て上げるためである。」エペソ人への手紙 4章11、12節。

「そして神は教会のうちに、まず使徒、次に預言者、等をお立てになった。」コリント人への第一の手紙

12章28節。「預言を軽んじてはならない。」テサロニケ人への第一の手紙

5章20節。なお、使徒行伝 13章1節;21章9節;ローマ人への手紙

7章6節;コリント人への第一の手紙 14章1節、24節、39節も参照せよ。預言者または預言は、キリストの教会の建て上げのためのものである。そして、神の言葉から、伝道者・牧者・教師が止むに先立って彼らが止むべきであったことを示しうる証拠は何ひとつ存在しない。ところが反対者は言う、「偽りの幻や夢があまりにも多かったので、その類のものは何であれ信頼できない。」確かに、サタンにはその偽物がある。彼は常に偽預言者を抱えてきたのであり、そして今、この彼の欺きと勝利の最後の時にあって、われわれがそれらを予期するのは当然である。偽物が存在するからという理由でそのような特別な啓示を退ける者は、同じ道理でさらに一歩進んで、神が夢や幻において人に御自身を啓示されたことをかつて否定してもよいことになる。というのも、偽物は常に存在してきたからである。

夢と幻は、神がご自身を人に啓示してこられた手段である。この手段によって神は預言者たちに語られ、福音の教会における諸賜物の中に預言の賜物を据えられ、さらに、夢と幻を『終わりの日々』のほかのしるしと同列に位置づけておられる。アーメン。

上述の所見において私の目的としたところは、聖書の教えに則って諸異議を退け、以下に述べる事柄に備えるべく読者の心を整えることであった。

WM. ミラー、

ニューヨーク州ロー・ハンプトン、1847年12月3日. ジェームズ・ホワイト『ミラー兄弟の夢』1-6.

1. 「小箱」は、我らの主イエス・キリストの再臨に関する聖書の偉大な諸真理であって、世界に公表するためにミラー兄弟に与えられたものを象徴する。
2. 「付された『鍵』」とは、彼が預言の言葉を解釈する方法、すなわち、聖句を聖句と比較し、聖書は自らを解釈するという原則であった。この鍵によって、ミラー兄弟は「小箱」、すなわち世に対する再臨の大いなる真理を開いた。
3. 「あらゆる種類と大きさ」の「宝玉、ダイヤモンド等」が、「宝石箱のそれぞれの位置に美しく配列されている」さまは、神の子ら [Malachi 3:17,]——すなわち、すべての教会から、またほとんどあらゆる身分と生活の境遇から出て、再臨の信仰を受け入れ、真理という聖なる大義のためにそれぞれの持ち場で大胆に立つ姿が見られた者たち——を表している。彼らがこの秩序のうちに歩み、それぞれ自らの務めに当たり、神の御前にへりくだって歩む間、彼らは世界に向かって「光と栄光」を映し出し、その輝きは、使徒たちの時代の教会にのみ匹敵するものであった。このメッセージ [Revelation 14:6, 7,] は、いわば風の翼に乗って伝播し、「来なさい、すべての用意は今や整った」 [Luke 14:17,] との招きは、力と効力をもって広く行き渡った。
4. 「人々が入って来はじめ、初めは人数が少なかったが、やがて群衆にまで増えた。」再臨の教理が最初にミラー兄弟とごく少数の者たちによって宣べ伝えられたとき、それはほとんど効果を及ぼさず、それによって目を覚まされた者もごくわずかであった。しかし1840年から1844年にかけては、どこでそれが宣べ伝えられても、その地域社会全体が揺り動かされた。
5. 飛翔する天使 [Revelation 14:6-7] が「神を恐れ、神に栄光を帰せよ。神の裁きの時が来たからである」と永遠の福音を最初に宣べ伝え始めたとき、イエスの来臨と回復を待望して多くの者が歓喜の声を上げた。しかしその後、彼らは、わずか前には彼らを喜びで満たしていたその真理に反対し、嘲り、嘲弄した。彼らは宝石を乱し、散らした。こうして、散乱の時が始まった1844年の秋に至る。  
  
これを銘記せよ。かつて「喜び叫んだ」者たちこそが、宝石をかき乱し、散らしたのである。そして、1844年以来、かつて真理を宣べ伝え、それを喜んだ者たちほど、群れをこれほど効果的に散らし、迷わせた者はいない。ところが彼らはその後、神の御業と、われわれの過去の再臨経験における預言の成就とを否認してきた。
6. 真正のものの中に散在していた「偽の宝石と偽造貨幣」は、1844年に戸が閉ざされて以来の、偽の回心者、すなわち「異なる子ら」 [Hosea 5:7] を明白に表象している。
7. 「土や削り屑、砂、およびあらゆる種類の廃屑」は、1844年の秋以来、再臨信徒の間に持ち込まれた種々多様かつ数多の誤謬を象徴している。ここではそのうちのいくつかに言及する。

1. 「真夜中の叫び」が発せられた直後、幾人かの「牧者」が不遜にも取った立場、すなわち、七月運動に伴った聖霊の厳粛に心を融かす力はメスマリズムの影響にすぎないとする立場。ジョージ・ストーズは、この立場を最初にとった者たちの一人であった。当時ニューヨーク市で刊行されていた『Midnight-Cry』に、1844年後半の彼の著述を見よ。J・V・ハイムズは、1845年春のオールバニ会議において、七月運動は深さ七フィートのメスマリズムを生み出したと言った。これは、その場に居合わせてその発言を聞いた者から私が聞いたものである。七月の叫びに積極的に加わった他の者たちも、その後その運動を悪魔の業であると断言してきた。キリストと聖霊のわざを悪魔に帰することは、われらの救い主の時代において冒瀆であったし、今もなお冒瀆である。2. 確定時期に関する多くの試み。1844年に2300日が終結して以来、その満了時期について、さまざまな人々によってかなりの数の日時が定められてきた。かくして彼らは「標石」を取り除き、再臨運動全体に暗闇と疑いを投げかけた。3. 心霊主義と、そのあらゆる空想と放縦。恐るべき死の業を成し遂げてきたこの悪魔の策略は、「削り屑」および「あらゆる類の瓦礫」によって、きわめて適切に表されている。心霊主義の毒を飲み干した者の多くは、われわれの過去の再臨経験の真実性を認めたが、この事実のゆえに、多くの者が、1843年および1844年に神が大いなる再臨運動を導かれたと信じることの自然の結実が心霊主義であると信じさせられてしまった。ペテロは、「彼らを贖った主さえ否むほどの、滅びに至る異端を持ち込む者たち」について語り、「そのゆえに、真理の道はそしられるであろう」と言っている。4. 「預言者エリヤ」であると自称するS・S・スノー。この男は、その奇異にして奔放な歩みのうちに、この死の業においても自らの役割を演じてきた。また、その歩みは、多くの誠実な魂の心において、待ち望む聖徒たちの真の立場を不評に陥れる傾向を及ぼしてきた。

この誤謬の目録には、さらに多くを付け加えることができる。たとえば、黙示録20章4節、7節の「一千年」を過去の出来事とみなす説、黙示録7章4節および14章1節の14万4千人、キリストの復活後に「よみがえって墓から出てきた」者たち、行い不要説、嬰兒滅亡説、等々である。これらの誤謬は、待ち望む群れに対して実に精力的に流布され、しきりに押しつけられたため、ミラー兄弟がその夢を見た時には、真の宝玉は「視野から排除され」、預言者の言葉が当てはまった。「裁きは退けられて後退し、義は遠くに立ち」等々。イザヤ書56章14節を見よ。

その当時、この地には現在の真理の大義を唱える再臨派の新聞は一紙も存在しなかった。『Day-Dawn』は小さき群れの真の立場を弁護した最後のものではあった。しかしそれも、主がミラー兄弟にこの夢をお与えになる数か月前に息絶え、そしてその最期のあえぎの中で、疲れ倦み嘆息する聖徒たちに、当時から数えて三十年先の未来に当たる一八七七年を、彼らの最終的解放の時として指し示した。ああ、ああ！このような悲しむべき有様を前に、ミラー兄弟が夢の中で「座して泣いた」としても、なんの不思議もない。

8. その小箱は、十人の乙女のたとえによって示されているとおり、ミラー兄弟が世界に公刊した再臨の真理を表している。マタイ25:1-11. 第一に時、1843年、第二に遅延の時、第三に真夜中の叫び、1844年の第七の月に、そして第四に閉ざされた戸である。1843年以来、再臨に関する諸紙を読んできた者で、ミラー兄弟が再臨史においてこれら四つの重要な要点を主張してきたことを否定する者はいない。この調和のとれ

た真理の体系、すなわち「小箱」は、自らの経験を退け、ミラー兄弟とともにいささかも恐れず世界に宣べ伝えたまさにその真理を否認した者たちによって、引き裂かれ、塵芥の中に散らされた。

9. 「塵払い」を持つその人は、第三の天使のメッセージ [黙示録14:9-12,] によって明らかにされた現在の真理の明白な光を象徴しており、今やその光は残りの民から誤謬を浄め去っている。現在の真理の運動は1848年の春に復興し始め、それ以来今日に至るまで興隆し、力を増してきた。「塵払い」は動いており、真理の明白な光の前で誤謬は消え去りつつある。そして、ついこの間まで暗黒と誤謬によって覆い隠され、視界から排されていた尊い宝石の幾つかが、今や現在の真理の明白な光の中に立っている。

宝玉を取り出し、誤謬を一掃するこの業は急速に増大しており、聖徒たちがことごとく探し出され、生ける神の印を受けるに至るまで、ますます大いなる力をもって進み行くことが定められている。これをエゼキエル書三十四章と比較せよ。そうすれば、1844年以來のこの暗く曇った日に散らされたご自分の群れを、神が集めると約束しておられることが分かるであろう。イエスが来られる前に、「小さき群れ」は「信仰の一致」へと集められる。今やイエスは、「みずからのために、善き業に熱心な特別な民」を清めておられ、彼が来られる時には、「しみも、しわも、またそのようなもののいっさいもない教会」を見いだされるであろう。「その手に箕があり、彼は徹底してその打ち場をきよめ、自分の小麦を倉に集める、等。」マタイ 3:12。

10. 第二の「前のものよりはるかに大きく、いっそう美しい箱」に、散らされていた「宝玉」「ダイヤモンド」および硬貨が集められたが、これは、散らされた群れが集められることになる、生ける現在の真理の広大な領域を表している。すなわち十四万四千人であり、彼らは皆、生ける神の印を有している。尊いダイヤモンドの一つたりとも、闇の中に取り残されることはない。なかには針の先ほどの大きさにも満たないものもあるが、神がご自身の宝を整えておられるこの日に、見落とされ、もれ落ちることはない。[マラキ 3:16-18] 神は御使いたちを遣わし、ソドムからロトを急ぎ出されたように、彼らを急ぎ出させることができる。「主は地上で短い業をなされる。」「彼は義においてそれを短くされる。」ローマ 9:28

参照. ジェームズ・ホワイト『ミラー兄弟の夢への脚注』